

## 日本の存在感とは？：世界の中のニッポンと工学



巻頭言

大政健史\*

NIPPON and Engineering in the World

Key Words : engineering education, global presense, international collaboration

2024年4月に工学研究科長・工学部長を拝命してから、非常に目まぐるしい毎日を過ごしてきたが、6月後半に、研究科の皆様や、各方面の皆様に変なご無理をお願いして、10日ほど、英国 Edinburgh とオランダ Rotterdam にて開催された海外の学会に招待を受けて参加した。参加したのは European Society of Advanced Cell Technology (ESACT) が2年に1回開催する大会と、European Federation of Biotechnology (EFB) が、これまた2年に1回開催する European Congress on Biotechnology (ECB) (今回は IUPUC の biotechnology sub-division が主催する IBS2024 も兼ねている) である。前者への参加は、自身が会長を務める日本動物細胞工学会 (JAAC) との30年近くにわたる交流を記念して、ESACT から JAAC に組織としては初めて「ESACT Medal」を授与されたためであり、後者においては、EFB のアジアにおけるカウンターパートである Asian Federation of Biotechnology (AFOB: 事務局は韓国 Incheon) の会長を拝命しており、アジアを代表して出席するためである。海外滞在中は、自身の研究や国際組織の運営について、様々に意見交換をしたり、国際共同研究・国際交流の打合せも行うこともできたが、滞在中もオンラインで日本での会議に出席したり、セミナーを行ったりしており、海外と日本との距離感の近さと便利さと同時に日本

からのがれられない不自由さも感じている。

18歳で大阪大学に入学した際には、自身が海外において英語にて発表したり、ましてや日本やアジアを代表して国際交流を行ったりするとは、まったく想像だにしていなかった。大阪大学工学部を受験先に選んだのも、外向きには母方の祖父が工学部の前身の大阪高等工業学校の卒業生だからということにしていたが、実際は、恥ずかしながら、受験した当時は大阪大学工学部においては二次試験において英語が課されておらず、英語が苦手な私にとって、これは天の助けと思ったからである。現在では何とかこなしているわけであるが、英語の苦手な学生にどうやって英語と国際コミュニケーション能力を身につけてもらうか。これは40年前とあまり変わってない課題であるように思われる。

今回は欧州への短期滞在であったが、日本の安さ(現地の物価の高さ)と日本の存在感の低下を強く感じている。若い助手の頃に、米国ニューヨーク州 University of Rochester で一年間海外研究を行った。当時も、現在と同様の円安で1ドル145円であり、為替の差に苦しめられたが、現在ほど、日本の安さは感じていなかったように思う。となると、やはり感じている大きな要因は日本の存在感の低下であろうか。100年以上前に、英国にウイスキー造りの研究で留学した私どもの先輩の大阪高等工業学校醸造科出身の竹鶴政孝氏は、英国グラスゴー大学で学んだものの、当時の高等工業で教えられた内容を超えることはなかったと回想している。当時から、大阪大学工学部は世界最先端であり、これは誇らしいことではないだろうか。一方、日本のウイスキーが世界で認められるためには、実際には大変長い年月を要したことも事実であり、世界に認められるというためには、海外に向けたそれなりの長い継続的な活動が必要であろう。現在、工学研究科・工学部にお



\* Takeshi OMASA

1963年11月生まれ  
大阪大学大学院工学研究科博士後期課程  
修了 (1992年)  
現在、大阪大学大学院工学研究科  
生物工学専攻 教授/工学部長/工学研  
究科長 博士(工学)  
専門/生物化学工学・動物細胞工学  
TEL : 06-6879-7938  
FAX : 06-6879-7938  
E-mail : omasa@bio.eng.osaka-u.ac.jp

いては、世界 56 国から 500 人以上の留学生が在籍している。人数としてはかなりの数ではあるが、実際のところ、まだ全学生の 10% 程度の割合でしかない。在席している学生をもっと活性化させ、工学研究科の魅力を海外に向けて発信し、さらに、世界中から talented な人材を集め、組織として継続的に国際化を進めて行く必要があるだろう。

このグローバルな時代には、自分と異なり同質でないこと、そして、異なる価値観、見方を持つ方々と意見を交わすことが重要であり、かつ、コミュニケーションによって価値観の共有を得ることが、ま

ずは国際人の第一歩であることは間違いない。我が国の 18 歳人口の大幅な減少が進んできている今、世界最先端であり続ける、存在感を出し続けるためには、より一層の国際化とその発信が求められている。工学の分野は、真理を探究するのみならず、人類社会に貢献するという大きな使命を背負っている。もうすぐ創始 130 年を迎える工学研究科であるが、一部の研究室や個人に頼らない組織的に国際化を担うためのシステムをさらに整備すべき時が来ていると感じているこの頃である。

